



第3次伝道旅行

暗唱 聖句

「しかし、わたしは自分の行程を走り終え、主イエスから賜わった、神のめぐみの福音をあかしする任務を果し得さえしたら、このいのちは自分にとって、少しも惜しいとは思わない」

(使徒行伝 20：24、口語訳)

「しかし、自分の決められた道を走りとおし、また、主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません」

(使徒言行録 20：24、新共同訳)

今週の 聖句

使徒言行録 18：24～28、使徒言行録 19 章、
使徒言行録 20：7～12、15～27、Ⅱコリント 4：8～14、
使徒言行録 21：1～15

安息日 午後 9/1

今週のテーマ

パウロの第3次伝道旅行に関するルカの物語は、かなり唐突に始まります。聖書のその箇所は、パウロが彼の宣教拠点であるアンティオキアでしばらく過ごしたあと、また旅に出て、「ガラテヤやフリギアの地方を次々に巡回し、すべての弟子たちを力づけた」(使徒 18：23)とだけ述べています。つまり、その旅行の最初の2400キロほどが、一つの文で言い尽くされているのです。

これは、この旅行の焦点がエフェソであったからでした。パウロはその町に、これまでの旅行の途中で滞在したどの町よりも長くどまりました。宣教的観点からすると、エフェソでの伝道は非常に実り豊かなものでした。パウロの説教の影響は、アジア州全域に及びました(使徒 19：10、26)。たぶんそれは、パウロの共労者の1人であったエパfrasによって(コロ 1：7、フィレ 23)、コロサイ、ヒエラポリス、ラオディキアの諸教会が設立されたのと同じ頃でした(コロ 4：12、13)。

この旅行で注目すべきことは、それが使徒言行録に記されているパウロの最後の旅であるという点です。彼は自由人としてこの旅に出ましたが、ルカはもう一つの旅行も記しています。それはローマへの旅です。しかし、この時のパウロは囚人でした。

使徒言行録 18:24～28 は、パウロがエフェソへの途上にあつたとき、アポロというユダヤ人信者がこの町へ来たと記録しています。彼は雄弁で、聖書に精通していました。アポロがイエスに従う者であつたことは、「彼は主の道を受け入れており、イエスのことについて熱心に語り、正確に教えていた」（使徒 18:25）というルカの描写から明らかです。しかし、ヨハネのバプテスマしか知りませんでした。バプテスマのヨハネからバプテスマを受けたということなので、アポロがイエスを知つたのは、イエスが地上におられた間になりますが、受難や五旬祭の出来事が起こる前に、その地域から離れたか、アレキサンドリアへ帰つたに違いありません。

このことは、なぜアキラとプリスキラがさらに彼を教えたのか、その理由を説明しています。アポロは、イエスがイスラエルのメシアであつたことは聖書から示すことができましたが、アキラとプリスキラはそれ以上のことをアポロにしました。エフェソのほかの信者とともに、2人はアカイア州の諸教会宛ての推薦状を彼に持たせたのです（同 18:27）。その手紙のお陰で、アポロはコリントにおいて効果的な伝道を行うことができました（Iコリ 3:4～6、4:6、16:12）。

使徒言行録 19:1～7 を読んでください。アポロの物語は、パウロがエフェソに到着してすぐに出会つた12人の話とつながっています。なぜなら、状況がよく似ているからです。「弟子」（使徒 19:1）と呼ばれていることや、彼らへのパウロの質問は（同 19:2）、すでにイエスの信者であつたことをはっきり伝えています。同時に、パウロへの答えは、アポロと同様、彼らがバプテスマのヨハネの元弟子であり、五旬祭を経験することなくイエスの弟子になっていたことを示しています。彼らは主とのより深い体験を享受する機会を得る必要がありました。

「エペソへ到着してすぐ、パウロは、アポロのようにバプテスマのヨハネの弟子であつた12人の兄弟たちを見つけた。彼らもアポロのように、キリストの使命についてある程度の知識を持っていた。彼らにはアポロのような能力はなかったが、彼と同じ誠実な信仰をもって、彼らが受けていた知識をひろめようとしていた」（『希望への光』1462 ページ、『患難から栄光へ』下巻 305 ページ）。

私たちは彼らの再バプテスマを、このような特殊な状況に照らして見るべきです。彼らはキリスト教の別の教派の出身者でもありませんし、回心を体験しつつあつたわけでもありません。彼らはキリスト教の主流に組み入れられただけでした。彼らが“霊”を受けて異言を語つたというのは、アポロと同様、彼らがキリスト教の宣教師であり、どこへ行こうと、今やイエス・キリストをあかしするのに十分な力を得ていたことを意味します。

パウロはエフェソでも、まず会堂で説教をするという慣例に従いました。反対が起こると、彼と新しい信者たちは、ティラノという人の講堂に移り、その場所でパウロは2年間、毎日説教しました（使徒19：8～10）。ルカはパウロのエフェソ伝道を要約して、アジア州全体に福音が広く行き渡った、と述べています（同19：10、26）。

ルカは使徒言行録19：11～20において、魔術や迷信的な行為がかなり日常的な町で神の力が勝利したことを説明する奇跡の物語を少し加えています。神がパウロを通しておいやしになったことは、疑いの余地がありません。しかし、使徒が触れた手ぬぐいや前掛けにさえいやす力があつたというのは（使徒19：12）、イエスが長血の止まらない女をいやされたことと似ていますが（ルカ8：44）、ある人には奇妙に聞こえるかもしれません。エフェソの人たちの迷信深さのゆえに、ルカが言うように、神は「目覚ましい奇跡」（使徒19：11）を行われたのかもしれませんが。たぶんこれは、神が人々の理解力において彼らの必要を満たされた一つの例なのでしょう。

エフェソでの宣教の結果に満足したパウロは、エルサレムに行くことにしました（使徒19：21）。ルカはその旅行の理由を述べていませんが、私たちはパウロの別の書簡によって、彼がエルサレム教会の貧困問題を軽減するために集めた資金を届けたいと望んでいたことを知っています（ロマ15：25～27、Iコリ16：1～3）。初期の財産の共有と、皇帝クラウディウス時代の激しい飢饉がユダヤの信者を貧しくさせたのですが、パウロは、援助を求める彼らの訴えの中に（ガラ2：10）、彼の使徒性に対する彼らの信頼と、今や文化を超えた教会の一致を強める好機を見たのでした。彼がさらされるだろう危険を知りつつも……（使徒20：22、23、ロマ15：31）。

使徒言行録19：23～40を読んでください。その反対は多神教礼拝に関係しており、それはパウロの伝道によってひどく脅威にさらされていました。デメトリオの真の動機は、明らかに金銭上のことでしたが、彼はそれを宗教的な動機に変えることができました。なぜなら、古代世界の七大不思議の一つに数えられていたアルテミス（別名ダイアナ）神殿が、エフェソにあったからです。

◆ 使徒言行録19：27を読んでください。デメトリオは、お金が入り続けるために、宗教的「信心深さ」を持ち込みました。どれほど巧妙であったか、注目してください。私たちクリスチャンは、同様に信仰を利用しないよう、あるいは信仰に関して信心深さを装わないよう、なぜ注意しなければならないのですか。

騒動のあと（使徒 19：23～40）、パウロはエフェソを去ることにしました。しかし彼は、エルサレムへ直行するのではなく、マケドニア州とアカイア州を通して大きく迂回したのです（同 20：1～3）。この旅では、異邦人教会の代表者たちが彼に同行しました（同 20：4）。

使徒言行録 20：7～12 を読んでください。トロアスでのパウロの短い滞在は、「週の初めの日」（使徒 20：7）に持たれた教会の集会で終わりました。彼らは「パンを裂くため」に集まったのですが、それはたぶん聖餐式のことでしょう。ただし、エルサレム教会の初期の頃から、しばしばそれと組み合わされていた交わりの食事（同 2：42、46）がなされたかどうかは、わかりません。杯や祈りに触れていないからといって、その可能性を否定することはできません。しかし肝心なのは、この出来事が、パウロの時代、少なくとも異邦人教会が礼拝の日として安息日を日曜日にすでに置き換えていた証拠だ、としばしば言われる点です。

しかし、そのような主張をする前に、この集会の性質とともに、集会が持たれた正確な曜日を立証する必要があります。エウティコが熟睡したことは言うまでもなく（使徒 20：9）、「ともし火」（使徒 20：8）を使用したことへの言及は、パウロの話が「夜中まで」（同 20：7）、さらには「夜明けまで」（同 20：11）続いた事実とともに、それが夜の集会であったことを明らかにしています。

しかし問題は、それが日曜の前夜であったか、あるいは日曜の夜であったかという点です。その答えは、ルカが用いている時間計算の方式によって決まります。つまり、日没から日没までのユダヤ方式か、深夜から深夜までのローマ方式かということです。もし前者であれば、それは土曜日の夜であり、後者であれば、日曜日の夜ということになります。

いずれにせよ、使徒言行録 20：7～12 の状況は、たとえ集会が日曜日の夜に持たれたとしても、それは定期的な教会の集会ではなく、翌朝のパウロの出発ゆえの特別な集会であったことを示しています。従って、この単独の、例外的出来事で、日曜順守を支持できると考えることは困難です。事実、支持できません。

◆ 第七日安息日を守る妥当性のあらゆる理由について、じっくり考えてください。安息日に関する聖書の力強い支持は、アドベンチストとしての私たちのアイデンティティーや、三天使の使命をこの世に広めるために私たちが召されたことを肯定するうえで、いかに助けとなりますか。

エルサレムへ向かう途中、パウロは別の場所にも立ち寄りました。今回はミレトスという町で、パウロはそこで、エフェソの教会の指導者たちに告別の辞を述べる機会を得ます。

使徒言行録 20:15～27 を読んでください。パウロは新たな旅行の計画をすでに立てており、その旅にはローマやスペインが含まれていた（ロマ 15:22～29）、彼は再びアジア州に戻ることは二度とあるまいと思っていました。そこでパウロは、エフェソで過ごした年月の説明責任報告のような形で彼のスピーチを始めました。しかしその報告は、過去だけでなく、つまり彼がエフェソの人たちの間でどのように生きたのかということだけでなく、未来にも、焦点を合わせています。なぜならパウロは、エルサレムで彼の身に起こりうることを恐れていたからです。

パウロの恐れは、根拠のないものではありませんでした。エルサレム教会は、パウロの迫害者としての過去や、彼が説いた割礼不要の福音のゆえに、敵意ではないにしろ、疑いをもって彼を見ていました（使徒 21:20～26）。ユダヤの当局者たちにとって、彼は裏切り者、宗教的伝統からの背教者でしかありませんでした（同 23:1、2）。また西暦 1 世紀の半ばまでに、とりわけローマの失政のせいで、ユダヤは革命的かつ国粋主義的理想論の虜（とりこ）にもなっていました。このような雰囲気、たぶん教会を含むユダヤ人社会のあらゆる階層に影響を及ぼしていたのです。そういう状況の中で、異邦人の間における元ファリサイ人の働きは、彼を悪名高い人物にしたに違いありません（同 21:27～36）。

パウロはさらなる心配も抱えていました。彼は使徒言行録 20:28～31 において、エフェソの教会の指導者たちが偽教師の問題をいかに扱うべきかに目を向けています。その偽教師たちは、群れを間違った方向へ導き、墮落させる残忍な狼（おおかみ）にたとえられています。つまり教会の中においてさえ、しかも教会の初期にもかかわらず、偽教師の危機は現実のものだったのです。ソロモンは、別の時代の、別の状況において、「太陽の下、新しいものは何ひとつない」（コヘ 1:9）と言いました。キリスト教会の歴史は、偽教師が教会に与えた途方もない被害を明らかにしています。この問題は、終末まで存在し続けるでしょう（Ⅱテモ 4:3）。

間違いなく、パウロは多くのことを気（き）かけ、多くの心配を抱えていました。しかし、彼の忠実さや勤勉さは、決して萎（な）えることはありませんでした。

◆ Ⅱコリント 4:8～14 を読んでください。試練が襲ってくるときに、私たち自身に適用するどのようなことを、パウロはここで述べていますか。究極的な希望をどこに置いていますか。

ミレトスのあと、ルカはパウロの旅を少し詳しく記録しています。依然、エルサレムへの途上でしたが、使徒はフェニキアの港町ティルスに1週間滞在しました。その町で、船荷を降ろすことになっていたのです（使徒 21:1～6）。しかし、パウロがそこにいる間、信者たちは彼に、エルサレムへ行かないように、としきりに頼みました。信者たちが“霊”に導かれて、エルサレムへ行かないようパウロに警告したということは、必ずしも使徒の先の助言と矛盾していません。使徒言行録 19:21 の「御霊に感じて」（口語訳）に相当するギリシア語「エセト エン トー プニューマティ」は、パウロが自分だけでこの結論にたどり着いたというより、むしろ「“霊”によって決心（決意）した」と表現されたほうがいいようです。肝心なのは、“霊”がティルスのクリスチャンたちに、パウロの前途に待ち受けている危険を示されたかもしれないということ、そして彼らが、人間的心配からではなく、計画を進めないように勧めたという点です。パウロ自身は、エルサレムで自分の身にどのようなことが起きるのか、わかっていませんでした（使徒 20:22、23）。神の助言は、パウロのような者に対してでさえ、必ずしもすべてを明らかにしないうのです。

使徒言行録 21:10～14 を読んでください。アガボはエルサレム出身の預言者で、使徒言行録 11:27～30 における飢饉の話の中ですでに登場していました。旧約聖書のいくつかの預言と同様（例えば、イザ 20:1～6、エレ 13:1～10）、彼のメッセージも行動で示すものでした。それは、パウロがエルサレムに着いたときに彼の身に起こること、彼の敵が彼を異邦人（ローマ人）に引き渡すことを生々しく説明する役割を果たしました。

パウロの同行者たちは、アガボのメッセージを預言としてではなく、警告として受け取ったため、彼らは、なんとかしてパウロをエルサレムへ行かせまいと説得しました。パウロは彼らの反応に深く心を打たれましたが、自分の命を犠牲にしても、彼の使命を果たそうと決心します。彼にとって、福音に誠実であることと教会の一致は、自分自身の安全や関心よりもずっと重要だったからです。

「パウロはこれまで、このような悲しい思いをもってエルサレムに近づいたことはなかった。彼は、友が少なく、敵が多くいることを知っていた。彼は、神のみ子を拒否して殺害した都、そして、今や、神の怒りが臨もうとしている都に近づいているのであった」（『希望への光』1507 ページ、『患難から栄光へ』下巻 83 ページ）。

◆ パウロは、誤解され、中傷され、虐待され、しばしば罵倒されたにもかかわらず、信仰によって突き進みました。どうしたら私たちは、落胆するような状況においても、同じことができるようになるのでしょうか。

「福音の宣教の成功が、新たにユダヤ人の怒りを引き起こした。ユダヤ人はもはや礼典律を守る必要はなくなり、異邦人はユダヤ人と同様に、アブラハムの子孫の特権にあずかるのである、という新しい教理が広まったとの報告が、各地から入って来ていた。……彼が強調した『もはやギリシャ人とユダヤ人、割礼と無割礼……の差別はない』という言葉、彼の敵たちは、はなはだしく神を冒瀆するものであるとみなし、彼の声を沈黙させなければならぬと決意した（コロサイ 3：11）」（『希望への光』1504 ページ、『患難から栄光へ』下巻 75 ページ）。

「またパウロは、同信の兄弟たちの同情と支援にさえ頼ることができなかった。悔い改めないユダヤ人たちは、しつこく彼につきまとして、時を移さず、直接また手紙の両方によって、彼と彼の働きに関する不利な報告を広めた。そして、使徒たちや長老たちのあるものは、この報告が真実であると信じて、何の反駁もしなければ、彼と一致しようとするどんな希望も示さなかった」（『希望への光』1507 ページ、『患難から栄光へ』下巻 83 ページ）。

話し合いのための質問

- ① パウロがエフェソで出会った12人の弟子は、もともとバプテスマのヨハネに従っていた者たちで、すでにイエスの弟子になっていました（使徒 19：1～7）。他の教派出身の（すでに沈めのバプテスマを受けている）クリスチャンがアドベンチストの信仰を受け入れる際に、再バプテスマを要求するためにこの聖書の箇所を用いることは正しいと、あなたは思いますか。なぜそう思うのですか。アポロが再バプテスマを受けなかった事実には、どのような意味があるのでしょうか。
- ② 安息日が日曜日に変更された、あるいは安息日はもはや拘束力を持たないということを証明しようとする際に人々が用いる論拠には、ほかにもいくつかあります。それらについて考えてみてください。私たちはそれらの論拠に、どう答えたらよいのでしょうか。しかも、安息日を守ることは、ほかの九つの戒めを守ることと同様、律法主義ではないと示す形で（つまり、もし私たちが信仰によって服従し、私たちの救いの唯一の希望がどこにあるのかを理解しているなら）、どのように答えたらよいのでしょうか。